

物理学委員会 物理教育研究分科会（第25期・第3回）

議事要旨

日時 令和3年10月15日（金）15：00～17：00

会場 オンライン（zoom）会議

出席者： 板倉委員、市川委員、岡委員（委員長）、笹尾委員（副委員長）、新永委員、千葉委員（幹事）、中山委員、松尾委員、覧具委員、笠委員（幹事）、和田委員、渡部委員、横山委員、大森不二雄先生（東北大学）、野尻美保子先生（KEK）

欠席者： 関口委員、駒宮委員

資料1 大森不二雄先生による説明資料、「物理学をはじめとする学問分野ごとの教育研究（DBER）の担い手と普及方策 ～海外の事例と日本の課題～」

資料2 野尻美保子先生による説明資料、「男子・女子がおかれる環境の違いを考慮した研究・介入の必要性について」

議 題

（1） 前回議事録確認

岡委員長より、令和3年4月30日開催の第1回物理教育研究分科会議事録（案）を諮り、これを了承した。

（2） 前期の提言に関する情報発信について（資料1、机上配布）

・東北大学大学教育支援センター（長）大森不二雄先生より、資料1に基づいて、物理学をはじめとする学問分野ごとの教育研究（DBER）の担い手と普及方策、特に海外の事例と日本の課題についての説明が行われた。また、本年3月に同センターが行った国内の物理教育研究者等へのインタビュー（委託）調査結果の概要が報告された。

・大森先生の説明後、多様多数の質問と議論、特にカール・ワイマンの方式（DBERを踏まえた授業改革のための学部・学科改革）の日本における実施と普及上の問題、今後のアクション、特に物理学研究者の教育への参加に関わる問題、等についての意見交換が行われた。

(3) 物理学教育におけるジェンダーギャップについて（資料2、机上配布）

・野尻美保子先生（KEK）より、資料2に基づいて、男子・女子がおかれる環境の違いを考慮した研究・介入の必要性について説明が行われた。

・野尻先生の説明後、多様多数の質問と議論、例えば正答率のジェンダー差として女子では記述式や長い文章に基づく問題が得意な傾向があること、これに関連する inclusive teaching technique の分析、日本におけるエリートプログラム（科学オリンピック等）における参加女子数の極端に少ない問題、等についての意見交換が行われた。

(4) その他（今後の予定など）

・笹尾委員より、物理学委員会にて議論された、学術会議における提言のあり方の見直しについて報告があった。そこで、特定分野への利益誘導があってはならず、そのために査読を厳密にする、「提言」と「見解」を分け「提言」のthresholdを上げるという方向性にあることが報告された。

・岡委員長から、今後の活動について、提言あるいは見解・記録の発出の目的のために、シンポジウムを開催し多数の意見を聞く機会を持ちたいとの提案があった。その内容として、(1) 前期の提言の具体化（DBER方式の実施等）、(2) ジェンダー問題、の2つについて議論を持ちたいとの提案があり、質疑が行われた。それに対して、笹尾委員より2つの問題をセットにすると議題が広くなりすぎるので、(1) に関して物理学会のシンポジウムとして、(2) に関しては学術会議全体のテーマであるので学術会議内でのシンポジウムとするのが良いという発言があった。また、シンポジウムの内容を録画して教育関係者や研究者に広く公開できるようにする、という提案もあった。詳しくは、幹事の間で議論することにした。

以上